

# 日本人チューターは留学生にどのような支援を意識しているか ——修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた探索的 研究——

竹口智之

This paper discusses the issues about related to the tutor system. Although A university has practiced the tutor system, the actual substance of support is not regularized, in addition, there is a limited knowledge about the recognition of students who are tutors. Therefore, in this study, by focusing on five Japanese students who are tutors, we analyzed the kind of supports they provide, and their perception about the supports. With regard to the results of the research, by using Modified Grounded Approach, 16 codes related to the supports, and perception were extracted. We intend to further examine how their recognition about supports is transformed, and their aptitude related to cross-cultural communication.

キーワード：チューター制度、支援、支援の認識、修正版グラウンデッド・セオリー

## 1. はじめに

来日する留学生へのチューター制度は、国立大学においては 1972 年から開始された。この制度は留学生に対し日本人学生があてがわれ、勉学・研究・日常生活を支援するシステムである。開始当初は国費留学生に限定された制度であったが、76 年には私費留学生に対しても適用範囲となった（横田・白土 2004）。留学生にとって少しでも円滑にかつ迅速に日本の大学、生活に適応できるよう開始された制度であるが、大学によっては、チューターと留学生の人間関係の諸問題も報告されている（水谷 1990<sup>1</sup> など）。

チューターに関する調査研究は、(1) チューター自身（主に日本人）を対象としたもの（田中 1995、1996 など）と、(2) チューター制度の対象となる留学生に焦点を当てたもの（権藤・白土1988 など）に大別される。また、チューター制度がどの程度機能しているかについて、日本人・留学生両者に調査をした小林（2007）の研究がある。この研究では質問紙調査をもとに、制度の有効性や問題点を考察したものである。しかし、クローズド・クエスチョンが多く、また、なぜチューター制度に有効性・問題点があるかの考察が不十分である。さらにチューター制度がどの程度機能しているかは大学（国立大学・私立大学など）によって異なり、また日本人側が留学生と人間

---

<sup>1</sup> チューターの任務期間完了前に留学生のほうから関係の解消を求められることが報告されている。

関係を構築していく過程は明らかになっていない点が多い。このことから本研究では関西圏のA大学に所属する日本人チューター学生を対象に、①A大学に在籍する日本人学生は留学生への支援をどのように認識しているか、②A大学に在籍する日本人学生は、留学生（新入生）に対し、どのような支援を行っているかについて分析・考察を行う。

## 2. A大学におけるチューター制度

A大学におけるチューター制度は、短期間（半年・1年単位）の短期留学生に対しては、1980年から「バディ」という名で始まり、95年に「日本語パートナー」となった。4年間在籍する学部留学生に対しては、「インターナショナルパートナー」があてがわれることになっている。A大学ではこの2種類のチューター制度が存在し、現在に至っている。1学期開始後、有志のチューターを募り、日本語パートナーのほうはどの学部からも選抜される。また、インターナショナルパートナーに対しては同学部の学生とマッチングが行われる。1人の留学生に対し、1人～2人の日本人学生がつくという形式をとっている<sup>2</sup>。

## 3. 調査方法と実施

### 3.1 調査方法

本研究は立場の異なるもの同士が、関係を構築していく過程を分析するものである。つまり、いかにして日本人学生がチューター制度を介し、どのような支援を行い、支援をどのように認識しているかというものである。このような関係性を分析、考察するには田中（1995, 1996）が行っている横断的・量的手法も存在する。しかし、本研究ではチューター制度に関わる日本人学生に対し、広範な質問紙法を実施するのが現実的に難しいことから、より深いデータ分析を目的としたグラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下GTA）を採用している。この手法は事物や対象の関係性と過程を分析するのに適しており、より現場の状況に合わせた理論を形成することが可能なものとなっている（木下1999）。

GTAの分析法においてはいくつかのバージョンが存在する（Glaser & Strauss 1967, Strauss & Corbin 1990, 木下1999, 2003など）が、本研究では得られたデータを文節ごとに切片（Sliced data）化せず、まとまりから現象を解釈することを重視した修正版GTA（Modified Grounded Theory Approach、木下1999, 2003以下M-GTA）を採用した。M-GTAは数段階にわたって概念化とカテゴリー収斂を経ることで、より妥当性の高い理論へと昇華するものである（木下1999, 2003）。本稿はM-GTAが辿る

---

<sup>2</sup> これらの情報はA大学の国際交流支援室との談話やメールなどから得た。

べき分析過程のうちの初期段階にあたる。

### 3.2 調査実施と調査協力者

A 大学のチューター制度を管轄する大学機構に依頼し、筆者の作成した調査依頼文をチューター制度に参加している学部生に一斉メールで送った。その後、調査依頼を承諾した学生が筆者の研究室を訪問し、筆者との一対一形式のインタビュー調査を行った。応募した日本人学生は全員が A 大学の大学 2～4 年生（5 名）である。全員がボランティアで A 大学のチューター制度の募集に応募している。インタビューは調査協力者の許可を得た上で録音した。調査に際し、質問文<sup>3</sup>を先行研究をもとに作成したが、筆者が気づいた点や、より詳細な情報を聞き出したい場合質問項目を加えていく、半構造的インタビューを行った。インタビュー時間は 30 分～50 分であった。調査時期は 2011 年 4 月である。調査協力者の概要は表 1 のとおりである。

表 1 調査協力者の属性

名前	A	B	C	D	E
性別	女	女	女	女	男
学年	4 回生	3 回生	3 回生	3 回生	2 回生
過去のチューター経験の有無	有	有	無	無	有
今回のチューターの種類	IP	IP	IP	IP	IP NP
担当留学生の国籍	中国	中国	韓国	中国	中国 アメリカ

※ 表中「IP」はインターナショナルパートナーの略、「NP」は日本語パートナーの略

## 4. 結果

データは以下の手続きで分析を行った。まず、データから研究課題と関連のある意味内容のまとまりに解釈を加え、①「支援の認識」、②「支援行動」にあたりと筆者が判断したものを、分析の最小単位である「下位概念」とした。この下位概念を説明する定義と、具体例（バリエーション）を分析ワークシート<sup>4</sup>に書き記した。また、まと

<sup>3</sup> 「留学生にはどのような支援が必要だと思うか。」「自身は留学生とのかかわりの中でどのようなスキルを持っていると思うか、今後必要と思うか」などの項目を設定した。

<sup>4</sup> 最小単位である下位概念を命名し、その定義や具体例（バリエーション）、さらには下位概念から予想される事項をまとめたものである。分析ワークシートにおける具体例が多い場合、より汎用性の高い概念といえる。

める際に浮上した解釈や疑問点などはその都度理論的メモにまとめ、次の調査での質問事項や確認事項とした。次に、こうして得られた下位概念間で共通したもの、類似性のあるもの、相互作用の関連性があると判断したものを統合し、「概念」を作成した。これらの作業を繰り返しながら、新たなデータを加え、データ分析と概念を照合しながら、下位概念や概念の検討を行った。分析の結果、16 の概念<sup>5</sup>が生成された（表 2 参照）。以下それぞれの概念について、生成過程および定義を示す。

**表 2 抽出された概念**

概念	
1) 関係性の平等化	9) 気軽さ
2) 学校活動参加への促進	10) 共感性
3) 日本語学習・学習全般支援	11) 日本人の人間関係の仲介役
4) 他学部との連携	12) 日本人としての知識欲求
5) 日本社会参加への促進	13) 人間関係の距離模索
6) 異文化との触れ合い	14) 別グループの認識
7) コミュニケーション能力と能力認識	15) 支援の戸惑い
8) 聞き役としてのカウンセラー	16) 接触機会の願望

### 1) 関係性の平等化

この概念はチューターと留学生の人間関係を対等化・平等化する具体例から生成した（表 3 参照）。具体例からわかるように、年齢・学年の違い、日本語の能力差を一旦脱構築し、「日本の友人」とし働きかけている。基本的な対話を取るための「アドレス提示」から始まり、学年が下でも年齢が上にあたる留学生に対しても、友だち言葉で対話しようという同意に達している（「立場の平等化」）。また、A 大学は関西に位置する大学である。しかしながら、留学生にとって理解しやすいよう、留学生が一緒に学習したと思われる標準語でチューター側も対話することで円滑な理解を図ろうとする「言葉のシフトチェンジ」も含まれる。これらのことから、この概念を「プライバシー情報を提示し、年齢・立場の違いを均等化することで、関係性を構築していく段階」と定義した。

### 2) 学校活動参加への促進

この概念は講義などの大学生活の根幹にかかわるものから、サークルの紹介など、周辺の参加を促す具体例から生成した（表 4 参照）。当初はサークルなど、大学活動に

<sup>5</sup> 単一の下位概念がそのまま概念へと昇華したものも含む。

付随する活動を促すことで不安を減じ、勉強の余った時間を有意義に過ごさせようと促す「学校生活周辺参加の促し」から始まる。その後、留学生にとっての本分である講座の取り方や講座の内容の確認という「学校生活十全参加の促し」も含む。インターナショナルチューターの場合、留学生にとって学部の先輩にあたるので、語学とは異なった困難性を有する「講義難度の説明」を行っている。また、チューターから一方的に説明を与えるのではなく、双方向的に学校生活の情報を伝え合う「学校生活の情報交換」も含まれる。このことからこの概念を「学校生活に徐々に参加できるよう周辺参加から十全参加に至らせる過程」と定義した。

表 3 「関係性の平等化」の具体例及び下位概念

発話の具体例	下位概念
<ul style="list-style-type: none"> <li>・私：何か、イン…、メールとかでそういう連絡取ったりは、特には。</li> <li>・Aさん：一番最初は、ああ、その、ああ、してたんですよ。最初。</li> <li>・Dさん：あ、はい。携帯メールでしてますね。</li> </ul>	アドレス提示
<ul style="list-style-type: none"> <li>・Eさん：交換学生の場合は、まあ、やっぱり言葉づかいとか気をつけて、なるべく標準語に近い形で話しています。</li> </ul>	言葉のシフトチェンジ
<ul style="list-style-type: none"> <li>・Cさん：向こうの、まあ年の問題で、その留学生の方は、みんな敬語っていう感じだったんですけども、私もはじめ18歳だと思っていたので、そういうふうな接し方をしてたんですけども、むこうが26歳っていうのを知って、でも、お互いタメ語にしようみたいな話になって。</li> <li>・Eさん：もう友だち同士っていうような形で。</li> </ul>	立場の平等化

表 4 「学校活動参加への促進」の具体例と下位概念

発話の具体例	下位概念
<ul style="list-style-type: none"> <li>・Cさん：ああ、サークル紹介とかしてあげたり、バスケットボールが好きな子だったので、バスケが好きっていうことで紹介してあげたり、何か私のサークルとかにも連れて行って、みたり、あんまり気に入らなかったみたいですけど (笑)。</li> <li>・Eさん：僕の入ってるサークル行きたいんやけどっていうことで。</li> </ul>	学校生活周辺参加への促し
<ul style="list-style-type: none"> <li>・Aさん：それ必修なんですけど、私も1年生の時とってて、で、これわからへんわ一つて言われて、教えてあげるとかいうのはあるんですけども…。</li> <li>・Bさん：私がしたのはその履修の、取り方とあと、何か、必修登録をそこでするとときに、何か授業の時間割が出てこないみたいな感じだったので、事務所の場所とか、その事務所行ったらいいんだよ、みたいな、教えていました。</li> </ul>	学校生活十全参加の促し
<ul style="list-style-type: none"> <li>・Bさん：あれをちょっと、語学関係なしに、最初は難しいっていうことを、彼女に言っていて、あたしも相談したり一緒に組んだりして。</li> </ul>	講義難度の説明
<ul style="list-style-type: none"> <li>・Cさん：はじめは履修を聞いたり部活の話とか、奨学金の話をしてたんですけども…。</li> <li>・Dさん：何かもっと、何か授業もできなくて、ここがとか聞いて来られたりするのかなあって思ったんですけども、いや授業でもわかったみたいな。めちゃくちゃに (笑)、な感じで、ああ授業わかってんねやあって思って。</li> </ul>	学校生活の情報交換

### 3) 日本語学習・学習全般支援

この概念は学校内外の日本語学習や、学部の課題に対する援助全般に関する具体例から生成した（表 5 参照）。日本語チューターは日本語の宿題の補助を行わないのが、国際交流支援室との取り決めの一つである。しかしながら、留学生は大学の教室内の日本語授業のみから日本語を学習しているのではない。教室外の日本語に関する疑問に出くわすたびにそれをチューターに質問し、チューターはそれに応えようとする「日常日本語の説明」が含まれる。また、留学生が日本人の友人にメールを送る際、その日本語に間違いがないかどうかを、チューター側は依頼され、その依頼を請けるという「日常日本語のチェック」も含まれる。さらに、大学の講義における専門的な用語に留学生がついていけない場合がある。難解な漢語の意味内容を説明する「漢字の読み方指導」や「課題の共同作業」、また授業解釈の確認である「授業の学生の解釈確認」もここに含まれる。このことからこの概念を「学校内外の日本語や講義の内容解釈について支援すること」と定義した。

表 5 「日本語学習・学習全般支援」の具体例と下位概念

発話の具体例	下位概念
<ul style="list-style-type: none"> <li>・A さん： で、そこで、「もうこの意味わかるん？」みたいな、この word がわかってなかったら、絶対話が續かないところでは「この意味わかる？」とか、聞いて、「わかんない」って聞いたら、それ教えてあげて、話についてくれるようにしたりとか、意味、単語の意味とか、この言葉こうやって使うんだよとか、それ日本語の説明っていうんですかね。</li> <li>・E さん： 日本語のこういうところが、ちょっと気になるみたいなことを言われたりしてくれるんで…。</li> </ul>	日常日本語の説明
<ul style="list-style-type: none"> <li>・B さん： …例えば日本人の友だちに、彼が、メールで日本語で、「この文章おかしくない？」とか、何かそういうのは、学校の先生には聞きにくいじゃないですか。そういうことを、うちがここの点とか直した方がいいよって言ってあげたりとか、しましたね。</li> </ul>	日常日本語のチェック
<ul style="list-style-type: none"> <li>・E さん： ちょっとあのう、漢字の読み方指導とか、まあやってたんですよ。</li> </ul>	漢字の読み書き指導
<ul style="list-style-type: none"> <li>・E さん： 課題の出る授業を取っていたらしくて、でまあ、レポートの書き方がわからないっていうのを、言われてたんで、じゃあその一緒にレポートを作ってみようかっていって、パソコン 2 台並べて、一緒にやってみたりとか、ですね。</li> </ul>	課題の共同作業
<ul style="list-style-type: none"> <li>・E さん： もう授業中に出てきた漢字の読み方とか、特に教科書なんかは日本語の教科書使ってるんで、あのう、自分の子の解釈の仕方が、あってるんかっていうのをずっと聞かれてやってて。</li> </ul>	授業の学生の解釈確認

### 4) 他学部との連携

この概念は前述の「日本語学習・学習全般支援」のうち、学部を越えた支援に関する具体例から生成した。インターナショナルパートナーは基本的に同学部の学生が留学生を担当することになっている。しかしながら留学生に一般講義の学習に困難が見

られる場合、国際交流支援室の教員が別ルートで学生を募り、支援にあたらせる場合がある。この概念が抽出されたのは E からのみであるが、支援という点では重要な項目と思われたので、概念として残すこととした。このチューターは、難解な法律用語の理解に苦心している学生の支援にあたることとなった。E 自身も法学が専門ではないものの、その方面に詳しい友人に当たり、留学生の支援を共同で担当している。このことからこの概念を「自身の専門外の知識を学部外から獲得し、支援にあたる方略」と定義した。

#### 5) 日本社会参加への促進

この概念は学校外の日本社会参加全般に関する具体例から生成した（表 6 参照）。チューターはビザ取得のために留学生に同行することにより、お互いの関係性を構築する。この下位概念を「日本社会周辺参加への促し」とした。また、学校内だけではなく、学校外でも日本の景観の些細な点や若者言葉の説明などを行う「日本社会周辺参加の説明」も含まれる。さらに、当初は周辺参加であったのが、十全参加へと発展させるために相談に応じる「日本社会十全参加への情報提示」も存在する。これらのことからこの概念を、「留学生が学校外の日本社会に参加するための過程的支援」と定義した。

表 6 「日本社会参加への促進」の具体例と下位概念

発話の具体例	下位概念
・B さん：バスの中で、電車の定期取りに行ったりとか、そこで一番がっつり時間的にも、接する日本人だと思うんで…。	日本社会周辺参加への促し
・A さん：難しい単語とか、日本語でいえば今の若者言葉で言ったり、省略された言葉とか、最近の言葉とかやっぱりわかってなくて、「知ってる？」って聞いたら…。 ・B さん：生活面は一緒に遊びに行ったときに、看板である漢字何て読むとか、どういう意味とか、そういうのはしましたけど…。	日本社会周辺参加の説明
・B さん：これから卒業してどうしていこうとか、早くてあと 1 年ぐらいで大学卒業するねんけど、その時日本に住みたいから、どういう方向があるのか調べたり、それと「日本の知ってる？」とか、あとは、まあ人生を方向付けるような、けっこう割と重大な話とかもしたことはあります。	日本社会十全参加への情報提示

#### 6) 異文化との触れ合い

この概念は異文化に対する漠然とした憧憬から、異文化に触れることによって視野が広がった経緯などが含まれている（表 7 参照）。当初は「異文化への関心」「国際志向」といったいわば異文化に対するほぼ無防備状態から、徐々に「相手文化からの学習」へと移行し、また、それまで日本国内で培われた日本文化と異なっても納得できる「異文化としての割り切り」となる。やがて、それは「相手文化の理解欲求」によ



り、「ステレオタイプの変化」「異文化からの視野拡大」へと発展する。こういった異文化交流を通じ自身の異文化接触欲求のみならず、「相手（留学生）の趣向を掴む」という行動に転じるようになる。これらのことからこの概念を「異文化交流することによって自己成長し、結果的に他者支援ができるようになる過程」と定義した。

表 7 「異文化との触れ合い」の具体例と下位概念

発話の具体例	下位概念
・Bさん：中国語も、中国の話聞けるかなあって思って、で、応募したんですけど…。	異文化への関心
・Aさん：何か、外国の方と、何らかの関係を持ちたい、っていうか、そういうのがもともとあって、それがきっかけで始めたっていうのもあるんですけども。 ・Bさん：…国際交流とかが好きで、色々な国の方と関わりたいなあって思って…。	国際志向
・Aさん：今までは別に、何でもいやって思って、周りに合わせとけばいいやみたいにしてた価値観が、言うことも大切なあって思ったし、何らかの価値観の変化っていうのはすごい…。	相手文化からの学習
・Aさん：もうカルチャーの違いって割り切っていたし、だから特にはなかったですね。	異文化としての割り切り
・Aさん：だからその国に対する、知識とか、言語もそうやし、そのスキルを持ってたら、まああるに越したことはないですね。 ・Bさん：…私が教えてあげられるものが、使えないんですよ。何かもっと深く踏み込んで、色々な国の文化とか、もちろん相手のことも知らないと、理解されないじゃないですけども、深いところまで行かないんじゃないかなって気がしてます。	相手文化の理解欲求
・Eさん：やっぱり〇〇っていうものに対する意識は変わりましたね。	ステレオタイプの変化
・Aさん：多分、今までの私やったら、何か「絶対違うし」とか言うて、もうぶつかっていたと思うんですよ。だからそれも、何か違う、考え方違うねやみたいなんわかってるし、潜在的に。	異文化からの視野拡大
・Aさん：その子が、まず京都とかめっちゃくちゃ好きで、異文化的なことがすごい好きやったんで、せっかく関西いるのでじゃあ、京都行くみたいな感じで。	相手の趣向を掴む

## 7) コミュニケーション能力と能力認識

この概念は自身が生来有している性格から、留学生とコミュニケーションをとり、そのことによってコミュニケーション能力全般が向上したという実感と、さらなるコミュニケーションを図るのに足りない部分の実感という具体例から生成した（表 8 参照）。具体例から見ると「本人の社交性」「会話の膨らまし」「コミュニケーション能力全般の向上」「留学生側の言語能力不足認識」といった内容が見受けられた。そこでこの概念を「留学生側とさらなるコミュニケーションを取ろうとする意識」と定義した。

## 8) 聞き役としてのカウンセラー

この概念は留学生の日本語学習が不振に陥ったり、精神的な悩みを抱えた際、留学生の聞き役となったり、精神的な支え役となっている認識から生成した（表 9 参照）。チューターは前述の異文化接触という有意義な機会を享受することはできるものの、



関係性構築のきっかけとしては「無私の支援希望」から始まる。また、ある意味においては日本人と同様の扱いをする「国籍無関係のアドバイザー」となる。さらに留学生からの自発的な「フィードバックを待つ」ことや「安心感作りとしての存在」となることで、学校生活の不安を取り除こうとしている。また、留学生が自身の日本語能力に不安を抱いた際「日本語能力鼓舞」を実行することで、学業に再び円滑に臨める配慮を行っている。こういったことからこの概念の定義を、「留学生の不安を取り除く、精神的支援」と定義した。

表 8 「コミュニケーション能力と能力認識」の具体例と発話

発話の具体例	下位概念
・C さん：けっこう社交的なんで、日本人とか拘わらず、そのいろんな国の方と交流したいなあと、思ってるんで、そのパートナーの子以外にも、その子の友だちとかとも、積極的に話してみるっていうのが…。	本人の社交性
・E さん：まあその子がトピック、話題を出してくれて、で、話が盛り上がるっていう感じだったんです。	会話の膨らまし
・E さん：人とのコミュニケーションの仕方っていうのが、けっこう上手くなったんじゃないかなっていうのは、ありますね。	コミュニケーション能力全般の向上
・E さん：やっぱり日本独特の表現方法ってあるじゃないですか。で、逆にそれを英語に置き換えるっていうか、まあ、ほとんど日本語の会話だったので、あもう、相手かわからない顔したりとか、え、それってどういうことって聞かれたときに、どう表現していいのかっていうのが、やっぱりまああもう、ちょっと英語得意だからっていてもやっぱり英語力乏しいほうなので、どういえばいいのかなっていうのが、やっぱり考えましたね。	留学生側の言語能力不足認識

表 9 「聞き役としてのカウンセラー」の具体例と発話

発話の具体例	下位概念
・A さん：何か、人にできる自分が最大限にできること、をやっている人になりたいなって思って、やってるんですけども。 ・D さん：やっぱり留学とかしていたらすごい、不安だと思って、だからちょっとでも助けてあげたいなあと思って。	無私の支援希望
・B さん：(悩みがあれば)日本人の友だちに言うように、同じように言います。	国籍無関係のアドバイザー
・E さん：まあ、とにかく「学校どう?」とか、えっと「日本の生活はどう?」っていうのを聞いて、でそれに対して、どういうふうにゆってくるかなっていうのをずっと、してました。	フィードバックを待つ
・D さん：でもなんか、まあそういう人がいるっていう安心感はあるんだろうなとは思います。	安心感作りとしての存在
・A さん：たとえば…。まあほとんどなかったんですけど、日本語 1 回スランプがあった時があったんですよ。多分。めっちゃしゃべれるのに、自分は喋れてないと思ってるんですね。どっかで。(中略) しゃげてるって感じで。もう日本人から見てもしゃべってんねんから、大丈夫みたいなことを言ったら、「あ、そう」みたいな軽い感じで。でも、そんなには続いてなかったですね。	日本語能力鼓舞

## 9) 気軽さ

この概念はチューターと留学生との関係形成・維持を重く受け取るのではなく、お互いに負担のないようにしていくという具体例から形成した（表 10 参照）。まずは気軽な動機から人間関係を形成していこうとする「軽い友人作り」から始まり、異文化接触ではあるものの、重荷にならない関係を維持していこうとする「肩ひじ張らない交流」へと移行する。チューターの立場から考慮すると、当初は「支援」というものを強調しない手法も一考する必要があるかもしれない。こういったことからこの概念の定義を「心理的負荷の軽い人間関係の形成・維持」と定義した。

表 10 「気軽さ」の具体例と発話

発話の具体例	下位概念
・Aさん：普通に動機は軽い感じで、割と友だちできたらいいなあって感じで。	軽い友人作り
・Cさん：その、支援してる気分じゃなくて、交流しているというのが全て楽しい…。	肩ひじ張らない交流

## 10) 共感性

この概念は異文化コミュニケーションをとりながらも、相手との共通項目を探ろうとする具体例から形成した。留学生と交流するに際し、最低限自分が保持しておくべき能力としてチューターが認識していることが発言から伺えた。このことから、この概念を「信頼関係を形成するため、互いが知り合おうとする気持ち」と定義した。

## 11) 日本人の人間関係づくりの仲介役

この概念はチューターを介して、他の日本人学生の仲間を増やしていこうとする具体例から抽出された（表 11 参照）。チューターを通して、日本人の友人が増えるのは日本語の学習にも一助となっていることが発言から観察された。このことから、この概念を「新たな日本人とのネットワーク形成の支援」と定義した。

表 11 「日本人の人間関係づくりの仲介役」の具体例と発話

発話の具体例
・Aさん：ああ…。そうですね。まあ私の友だちを、まあけっこう紹介して、その中で、ホントの日本語がわかるじゃないですか。
・Aさん：絶対最初にチューターになるから、ここを軸に友だちを増やしていく人もいるし。

## 12) 日本人としての知識欲求

この概念はチューター活動を通し、自身が日本や日本文化への知的欲求を強めていく具体例から抽出された（表 12 参照）。チューター側は当初からそれを意識しているわけではないものの、留学生との関わりから「代表性としての日本人」として見られ

ていることを自覚する。しかしながら、日本全般について伝えようにも「自身の日本文化知識不足認識」から、思うようにそれができていない現実直面することになる。留学生と対等に付き合っていくために、日本や「一般教養の欲求」を持つようになる。これらのことから、この概念を「留学生とより深い交流を可能にするために、伝えるべき日本・日本文化教養の知識を求める気持ち」と定義した。

### 13) 人間関係の距離模索

この概念はチューターが留学生とどのような関係を築いていくべきか、探索している具体例から抽出された（表 13 参照）。両者が会って間もないころ、もしくは両者が会ってしばらくしてから、互いの人間関係が深みに入って逆に崩れないように気遣っている点が発話から伺える。特に、すでに学校での過ごし方や社会スキルが既に高い留学生とペアになった場合、チューター側の支援も限られ、どのように人間関係の距離を詰めていくか測りかねている。このことから、この概念を「チューターと留学生の人間関係のあり方を模索する段階」と定義する。

表 12 「日本人としての知識欲求」の具体例と発話

発話の具体例	下位概念
・A さん：やっぱり、その留学している期間って絶対、その期間が決まっているわけで、一生続くことじゃないんで、そこで出会った人によって、そのイメージが、その国のイメージが変わったりするじゃないですか。だからそこで何か、すごい人やったから、私もこんな人になりたいなあって、思ってます。	代表性の日本人
・B さん：…何か外国人と接して思うのが、すごい（自分が）日本のことを知らないなっていうことを思ってます。	自身の日本文化知識不足認識
・B さん：…そのしゃべったりするのができても、たまに知るべきことを知ってないと、深い話ができないかなっていう感じですね。	一般教養の欲求

表 13 「人間関係の距離模索」の具体例と発話

発話の具体例
・B さん：いきなり懇親会で、ペア発表されてって感じだったので、いまいちどういう距離感を保…、距離感がわからなくて、どういうふうにするのが普通なのか、で、応募してた場所からどういう距離、距離感っていうか、どういう環境を求められているのか、いまいちわかっていない…。
・D さん：はい。逆にそんなに（留学生は）干渉されたくもないかなあって思いますし。
・E さん：今年それで見ると、やっぱり僕のほうから、何かお題出したりとか、何かまあちょっとぐらいの「学校どう？」ぐらいのことだったら聞けるんですけども、そんな何か、プライベートの関わるところまでは聞きだせないなっていうのがあって。

### 14) 別グループの認識

この概念は留学生が同国のコミュニティやネットワークを形成していることから、

パートナーの留学生がコミュニティ内にいる場合、自分たち日本人とは異なるコミュニティを認識せざるを得ない具体例から抽出した（表 14 参照）。留学生が校内で実行している交流は、留学生によっては主に同国人同士であるという「同国コミュニティの認識」から始まる。徐々にそれは日本人集団とは異なるという「コミュニティの違いの認識」となり、決まった時間以外には会う機会が限られるという「グループ別れの認識」へと至ってしまう。このことから、この概念を「チューターと留学生が分岐するコミュニティ形成の認識」と定義する。

表 14 「別グループの認識」の具体例と発話

発話の具体例	下位概念
<p>・ C さん：そのみんなが韓国人同士で仲良くなったり中国人同士で仲良くなったりしてるので、そっちで情報交換っていうのを、してる部分があつて…。</p> <p>・ 私：何か同国人同士で固まってるとかそういうことってありますか。</p> <p>D さん：ありますね。</p>	同国コミュニティの認識
<p>・ B さん：まあ、最初関わる前は、結構留学生は留学生で、私は日本人の関学の学生っていうふうに、結構へだたりをを考えていて、で、実際に、あんまり日本語パートナー以外と、関わる機会って彼らもないっていうふうに感じますし、遊ぶときもけっこう留学生同士で遊んでいたんで、そういう壁はあったんです。</p>	コミュニティの違い認識
<p>・ B さん：留学生に、留学生自身にも、そうやって日本人と関わるっていう気持ちがないのか、あるのかわからないんですけども、やっぱり分かれてたんですよ。私が 1 回生の時に周りにいた子も、みんなであつていうふうにはならなくて。</p>	グループ別れの認識

#### 15) 支援の戸惑い

この概念は留学生がすでに学校内外で必要とされている情報やストラテジーを熟知している場合、支援の仕方がわからなくなったり、自身のチューターとしての必要性を問うている具体例から抽出した（表 15 参照）。情報伝達をチューターの仕事の一つととらえているチューターは、留学生と学校内の情報をやり取りをしてもその情報量が留学生にとってすでに飽和状態であることに気づく（「学校生活の知識飽和状態」）。また、学校外でも様々な情報を提供しようとしても、その点においても留学生がある程度の知識を有している場合、「社会的スキルの高さに戸惑い」を感じてしまう。そうなると、「支援」だけではなく、話のきっかけをどこから始めたらいいのかわからないという「支援の仕方がわからない」状態になる。そこでチューター側は改めて自身の今後のあり方にやや疑問を抱くようになる（「自分の必要性問う」）。これらのことからこの概念を「留学生側が情報・スキルとも十分有している際に抱く、自身の必要性の再考」とした。

表 15 「支援の戸惑い」の具体例と発話

発話の具体例	下位概念
・Bさん：… 何か、(学校について) 他に説明することもないかなと思ってしまっ て…。	学校生活の知識飽和状態
・Dさん：(日本生活に) 馴染んでるし、ホントそんなに困っていることもなさそう で、私生活で、何か私たちよりすごい生活してて、だからそんなに馴染んでいるんや と思って。	社会的スキルの高さに戸惑い
・Eさん：その外国人登録の仕方も全部わかってる子なんで、どこから手助けしたら いいのかわからない、っていうのがあって、で、まあ、ホントにどう手つけていって いいかわからなかったの。	支援の仕方がわからない
・Cさん：そこ (外国人登録など) をこっちから提示したんですけども、あえて自分 で、行けるみたいな感じだったので、必要してないのかなと。	自分の必要性問う

### 16) 接触機会の願望

この概念は上記の「支援の戸惑い」を解消するために、自身からコンタクトをとる、または学校のシステムから互いが会う機会を設定してほしいという気持ちの具体例から抽出されたものである (表 16 参照)。当初のよそよそしい人間関係を少しでも近づけるべく、自ら「会う時間の希求」をしている。さらに、互いに授業で会えないことが多いため、会う時間設定を制度に求めることや行事的なものを学校側に求める「関係深化の契機の希求」をしている。これらのことからこの概念を、「会う時間を自ら捻出し、または学校側に要求することにより、チューターと留学生の人間関係を良好化したい気持ち」と定義した。

表 16 「接触機会の願望」の具体例と発話

発話の具体例	下位概念
・Aさん：もうちょっと、時間の猶予っていうんですか、もっと会う期間をもっと 早めて、あのう、授業教え合うみたいなことができる期間を作ってくれたら、もっ と会いやすかったのになっていうのはありますね。 ・私：そっか。もう少し何て言うんですかねえ。お互い接する時間って必要だと思 いますか。(Aさん頷く)。	会う時間の希求
・Bさん：今日はインターナショナルパートナーと留学生で、何でもいいですが も、十分に出かける機会があったらいいかなと。ただ1回こう出たら、まあ次どこ へ行こうかと言いやすいと思うんですけども、なかなかこっちからもいいにくいっ ていうか、どうやって言おうっていうのもありますね。それは向こうも感じてるん じゃないかなと思いますので。 ・Eさん：全体的にコーヒアワーみたいな感じで、もっと学生と接せれるような 機会を大学側で作ってもいいかなって。	関係深化の契機の希求

## 5. 考察

日本人チューターによる留学生への支援行動と、その認識を明らかにするために、

M-GTA を用いて A 大学に所属する日本人チューターのデータを分析した。結果として、16 の概念が生成された。この概念同士の関連を考察すると、日本人チューターの支援行動と、認識は以下のようにまとめられる。

まずは年齢や学年などの違いを一旦均質化し、より深い人間関係の構築を促すところから支援は始まる（概念①）。これは、チューター側自身も、新たな人間関係づくりを気軽な気持ちで始めてみたいという認識に起因するのではないだろうか。この「気軽さ」という認識は留学生との交流がある程度深まってからも継続するものと考えられる（概念⑨）。

また、日本人学生は自分に与えられた役割として、留学生が学校生活に徐々に参加できるよう促すだけではなく、学校の内外をつなぐ日本語の支援も実施している。また、専門的な漢字用語の理解が十分ではない留学生に対しては学部間を越えた支援やネットワークを発達させている E のような日本人チューターも存在している。こういった支援によって、留学生は学校だけではなく日本社会とより密接に関わりたいと意識し、その意識をチューターは尊重・促進していると考えられる（概念②～概念⑤）。

さらにチューターは支援や異文化交流を通して、留学生がより充実した学校生活を送るために、自身にどのような能力が必要であるかをモニタリングし、新たにスキルとして獲得していこうという傾向が見られる。現状維持ではなく、より深いコミュニケーションを図ろうという意識がチューター側に存在する。また、単にコミュニケーションを図ろうというだけではなく、ある場面においてはカウンセラーとしての役割を自覚するようになる。よりチューターとしての役割を全うするのに、まずは互いが知り合おうとする気持ちが必要であると認識しだす。さらにより充実した留学生生活を提供できるよう、日本人のネットワークを拡大するための配慮を実施していく。こういった交流を通じながら、自身に足りない教養をチューターとしての成長のための必要条件として自覚するようになる。（概念⑥～⑧、概念⑩～⑫）。

このようなことから、今回調査に携わったチューターは、チューター制度により能動的に参加し、チューター制度の規約を理解し実行するだけではなく、より自己成長を目指そうとしていることがわかる。

しかしながら一方で、心理的葛藤を訴えるチューターも存在していることは銘記しておく必要がある。すでに学習スキルが高く、日本社会にもほぼ問題なく参加している留学生に対し、支援のあり方に戸惑いを持つ概念も見受けられた。これは主に、学部生として入学した留学生とのチューター活動に携わっている学生から抽出された概念である。また、留学生同士でコミュニティを形成し、「彼ら同志で上手くやっている」とチューターが認識すると、自分の役割が何かを模索せざると得ないという状況も見受けられた。しかしながらこういった状況に単に受動的であるだけではなく、日本語補助以外で携われる異文化間活動をチューターは求めていると思われる（概念⑬～⑯）。

今後の課題としては、以下のことが考えられる。まずはチューター制度を通して留学生との関係性がどのように変容したかというより詳細な過程に注目する必要がある。また、日本人チューターのほとんどが口にしてきた異文化コミュニケーション能力を仕上げた素地の探求やその形成過程もあげられる。上記のことは、調査協力者をさらに募り、追調査を実施していくことによって解明したい。

#### 参考文献

- 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ —— 質的実証研究の再生』 弘文堂。
- (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 —— 質的研究の誘い —— 』 弘文堂。
- 小林浩明 (2007) 「チューター制度の改善と留学生アドバイジング」『北九州市立大学国際論集』 5 巻 pp.53～62.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory : Strategies for qualitative research*. New York : Aldine. (後藤隆・大出春江・水野節夫訳 (1996) 『データ対話型理論の発見 —— 調査からいかに理論をうみだすか —— 』 新曜社)
- 権藤与志夫・白土悟 (1988) 「外国人留学生の学習と生活に関する諸問題 —— 九州地区国・公・私立大学における質問紙調査報告」『比較教育文化研究施設紀要』 39 号, 九州大学教育学部附属比較教育文化研究施設, pp.69～98.
- 水谷修 (1990) 「留学生と日本語教育」『異文化間教育学会』 4 号, 異文化間教育学会, pp.86～101.
- Strauss, A. L., & Corbin, J. 1990. *Basic of qualitative research : Grounded theory producers and techniques*. Newbury Park, CA : Sage. (南裕子監訳 (1999) . 質的研究の基礎 : グラウンデッドセオリーの技法と手順. 医学書院.)
- 田中共子 (1995) 「日本人チューター学生の異文化接触体験 —— ソーシャル・サポートとソーシャル・スキルおよび自己の成長を中心に —— 」『広島大学留学生センター紀要』 6 号, pp.85～101.
- (1996) 「日本人チューター学生の異文化接触体験 (2) —— その役割と異文化交流に関する質問し調査 —— 」『広島大学留学生センター紀要』 7 号, pp.84～108.
- 横田雅弘・白土悟 (2004) 『留学生アドバイジング —— 学習・生活・心理をいかに支援するか —— 』 ナカニシヤ出版.



